

## 黙示録1章4-8節 「教会への挨拶」

### 1A 神からの挨拶 4-5

#### 1B 七つの教会 4

#### 2B 三位一体の神 4-5

### 2A キリストの贖い 5-6

#### 1B 血による罪からの解放 5

#### 2B 祭司の王国 6

### 3A 主の来臨 7-8

#### 1B 嘆くすべての者 7

#### 2B 神なる主 8

## 本文

黙示録1章を開いてください。私たちは今晚、4節から8節までを見ていきたいと思います。前回、私たちはこの黙示録全体のテーマが、「イエス・キリストの黙示」です。神は、ご自分のことばによって、ご自身がどのような方であるか、その栄光を現して来られましたが、今、イエス・キリストによって、その本質の全てを現してくださいました。そしてこの方の全てが現れる書として、黙示録があります。黙示とありますが、啓示のほうが正しいです。あるいは、「イエス・キリストの現れ」としたほうがよいでしょう。4節から8節は、ヨハネから教会への挨拶の文です。そこにも、イエス・キリストご自身がどのような方を、明かにしていています。

### 1A 神からの挨拶 4-5

<sup>4</sup> ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。今おられ、昔おられ、やがて来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、<sup>5a</sup> また、確かな証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにあるように。

#### 1B 七つの教会 4

黙示録は、アジアにある七つの教会に対するヨハネの手紙となっています。この前話しましたように、教会が紀元30年辺りに聖霊が降ることによって始まって、既に60年以上経っていました。イエス様の御伴をして、その方の十字架と復活を目撃した弟子たちは、残りがヨハネのみです。他の使徒たちは皆、殉教しました。そして教会は、ローマ帝国による第二波の迫害がドミティアヌスによって襲っていました。このように、イエス様の直接の目撃者がヨハネ以外にはいなくなっており、しかも教会に対する迫害が激しくなっている時のことです。2章と3章を読みますと分かりますように、教会には内部にもいろいろな問題が起こっていました。

それらは偏に、「イエス・キリストが生きておられることが、証しされていない。」ということに尽きたでしょう。したがって、主のお姿が現われるという幻は彼らにとって死活的でした。そして、私たちキリスト者にとって死活的です。私たちが聖霊によって、イエス・キリストの姿をはっきりと見えていない、けれども、外部にはキリスト者に対する圧迫が強くなっています。したがって、ヨハネがこの世を去る前に、主ご自身が最後の啓示を、父なる神にあって与えてくださったのです。

その受け手である七つの教会であります。地図を見てください。パトモス島に、ヨハネは流刑されていました。そこで主から啓示を受けたのですが、彼はドミティアヌスの死後、新しい皇帝になった時に釈放されて、おそらくエペソに戻ったものと思われます。そこで彼は、自分の聞いたこと、見たものを書き記したのでしょう。あるいはパトモス島で書き記したものを、エペソでその巻き物を回覧するように命じたのかもしれませんが。



教会ですが、エペソからスミルナ、スミルナからペルガモン、ティアテラ、サルデス、フィラデルフィア、そしてラオディキアの順番に、イエス様が2章と3章で御使いによって言葉を与えられます。おそらく、黙示録が回されたのも、この順番だったのでしょう。巻き物は写本にするのはとても時間がかかりますから、写本をしていても大した数ではなかったかもしれません。ですから、かつて他の手紙でもそうであったように、回覧していたと考えます。これら七つの教会の町の多くは、ローマにおいて非常に大きい都市でありました。そして、それぞれがローマの街路によって太い環状線がありました。地図で見ると、三角形になっています。

そして、これら七つの教会に対してどうして、語られたのか？ということですが、黙示録は、他の聖書の書物以上に、「七」という数字が多発します。今読んだように、「七つの御霊」とあります。そして、七つの教会には七人の御使いが遣わされています。5章には、七本の角と七つの目を持った小羊が出てきます。6章以降には巻き物の七つの封印が解かれます。それから七つのラッパの災いがあり、そして七つの鉢の災いがあります。10章には七つの雷が出て来て、また悪の勢力として七つの頭と七つの王冠を持っている赤い竜が出てきます(12:3)。

このように、七が数多く出て来ており、そして「七つの教会」の前には定冠詞、英語の the が付

いているそうです。そして小アジアには、コロサイにある教会など、他にも建て上げられた大きな教会がありました。ですから、ここにある「七」は象徴的なものなのです。2章と3章において、七つの教会にイエス様は、「3:6 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」とあり、この地域教会だけに語られているのではなく、教会全体に対して語られていることが分かります。七という数字は、聖書全体で使われており、「完全」という意味合いとして一貫して使われています。ですから、イエス様は、ヨハネに対して「この書をもって、七つの教会、すなわち世界の教会史全体に渡る諸教会に対する言葉としなさい。」と命じられているものと思われれます。私たちが今も七つの教会の中を生きており、その延長の中に生きているのだという意識を持つことは大切です。

## 2B 三位一体の神 4-5

そして、ヨハネは、三位一体の神の御名によって、恵みと平安があるようにと祈っています。

「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」は、父なる神です。これは神の永遠性を示しています。神は、時空を超えておられます。今、おられます。それだけでなく、昔おられます。神がおられなかった時はなく、天地創造の前から永遠の昔におられます。そして「後に来られる」つまり、最後の審判をもって臨まれる方です。思い出してください、主なる神がモーセに現れた時に、「出 3:14 わたしは『わたしはある』という者である。」と言われました。イエス様が、同じようにユダヤ人に語られて、アブラハムの前に、わたしはあると言われました。わたしがいた、と言われなくて、わたしはあると言われて、どんな時にもおられ、時空を超えて永遠におられることを宣言されました。

同じ神が永遠であることを知ることはとても大切です。私たちは、時代の中に生きています。当時の教会は、ローマの迫害の中に生きていました。その困難に耐える力は、そのような時代を超えたところにおられる神、永遠の神を信じていたからです。

そして、「その御座の前におられる七つの御霊から」ということですが、七つの教会と同じく、この「七」は完全を示すものです。「七つの御霊」については、ゼカリヤ書の中に預言されています。ちょっと開いて見ましょう。

主が、帰還したユダヤ人に勇気を与えるために、大祭司ヨシュアと総督ゼルバベルそれぞれに預言しました。ヨシュアについては、彼の前に「3:9 見よ、わたしがヨシュアの前に置いた石を。一つの石の上には、七つの目がある。見よ、わたしはそれに文字を彫る。」と言っています。この石は、偉大な大祭司キリストの来られる預言です。その石には七つの目がある、と預言していますね。それで次の章で、ゼルバベルに対する預言として、オリーブの二本の木の前にある七つの灯皿のある燭台の幻の主は見せました。そして、「4:6 これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。」と言われるのです。このオリーブの木からの油は、主の御霊を示していました。

そしてゼルバベルに対して語られます。「10 だれが、その日を小さなこととして蔑むのか。人々はゼルバベルの手にある重り縄を見て喜ぶ。これら七つは、全地を行き巡る【主】の目である。」七つの灯皿の油は御霊のことを示しており、それは全地を行き巡る目であり、先のヨシュアに対する預言、「石の上にある七つの目」であります。そして黙示録 5 章 6 節を読みます。「また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているのを見た。それは七つの角と七つの目を持っていた。その目は、全地に遣わされた神の七つの御霊であった。」このようにつながっているのです。前回の学びで、黙示録の象徴はそれほど難しいものではない、そして私的解釈を施してはならないという理由はここにあります。旧約聖書の預言がイエス・キリストを証しているということなのです。

そして、七つの御霊から教会に対しての挨拶ということですが。御霊がこれから全教会に対して、七つの目のようにして、世界で起こっていることをくまなく見ておられる御霊が語られるのです。教会に対して、「御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」と言われていました。

そして多くの人が、イザヤ書 11 章のメシヤ預言についても取り上げます。これも大切でしょう。「11:1-2 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。」エッサイの若枝、ナザレからのイエスがダビデの子であります。この方に聖霊が降りました。バプテスマを受けられる時に聖霊が降りましたが、その宣教の働きにおいて聖霊は、七つの特徴をもってイエスに臨まれます。主の霊、知恵の霊、悟りの霊、思慮の霊、力の霊、主を恐れる霊、知識の霊です。

そして<sup>5a</sup> また、確かな証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリスト」とありますが、イエス様については、ここから 8 節までずっと証しされています。この 5 節には、三つの働きが証しされています。

一つは、イエスが「確かな証人」であります。イエス様は父なる神を確かに証しされました。以前は、忠実な証人と訳されていました。父なる神が語られることを語り、御父がされることのみを行ない、父なる神と一つであるし、一つとなって動いておられました。イエス様は、十字架につけられる直前に、「ヨハ 14:9 わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」イエスさまを見れば父を見る、というぐらい、イエスさまは、父なる神を確かに、忠実に証しされていたのです。そして、主は昇天される前に弟子たちに約束されました。聖霊が臨まれて、私たちがイエスの証人となるのです(使徒 1:8)

それから、黙示録には「証人」であるとか、「証し」という言葉が多く出てきます。そのギリシア語は、μάρτυς(マルトユス)であり、英語ですと殉教者を示す言葉 martyr になっています。ですから、主は父なる神を証しされることによって、命を失うという危険をもって証言しておられたのです。そ

して事実、十字架で死なれました。同じようにして、イエス・キリストの証しをする者は、その証しのゆえに、命を落とすこともあるという覚悟をもって証しをするのだ、ということです。

そして、「死者の中から最初に生まれた方」とあります。以前は、よみがえらえたと訳されていましたが、正確にはギリシア語では、生まれるということです。しかし、これは詩篇二篇で、神がキリストに対して、「わたしが今日、あなたを生んだ。(7 節)」と言われたところから来ており、パウロは使徒 13 章、ピシディアのアンティオキアの会堂での説教で、よみがえりについての成就だと言っています。この方が人の子、ダビデの子のみならず、神ご自身の御子であることを公に現わしたのです。イザヤ書でも、ダビデの男の子として生まれた方が、神から与えられた子であり、神と同一であることを、イザヤが 9 章で預言しています。

そして、「地の王たちの支配者」と続きます。ですから、ヨハネは、イエス様の地上での証し、それからよみがえり、それから王の王として再臨されるという、三つの働きを紹介しています。主は、王の王、主の主として現れることを 19 章で教えています。ローマ帝国の中、皇帝が救い主であり主であり、そして神の子であるとされていたのですが、その中でイエスこそが救い主また主であり、神の御子であると信じていたのがキリスト者です。彼らにとっては、自分たちの信仰を潰しかねない地上の王たちの圧迫の中で、イエスこそが地上の王たちの支配者であることを告白しました。私たちはダニエル書で、主権者なる神が、いかに王を立て、王を倒されたかを見ました。今、私たちはそのような視点から、ロシアのプーチン大統領を見なければいけないし、他の支配者たちを見てくべきです。イエス様は、すべてを支配し、ご自身が戻られてからその力ある者たちに裁きを下されます。

## 2A キリストの贖い 5-6

ヨハネは、イエス・キリストについて続けて話しますが、この方のいかに私たちを贖ってくださったのか、そして神の国に招き入れられているかを話しています。「<sup>5b</sup> 私たちを愛し、その血によって私たちを罪から解放し、<sup>6</sup> また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。」

### 1B 血による罪からの解放 5

主は、まず、私たちを罪から解放してくださいました。それは、私たちを愛しているからだとあります。「1ヨハネ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」そして「その血によって私たちを罪から解放し」となります。主が私たちを愛して、血を流してくださいました。黙示録には、聖徒たちが血を流されたキリストによって、自分たちが罪から洗われ、解放されて、神のものとなったことを歌っています。「5:9-10 彼らは新しい歌を歌った。「あなたは、巻物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です。あなたは屠られて、すべての部族、言語、民族、国民の中から、あな

たの血によって人々を神のために贖い、10 私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」これから見ていく黙示録の話は、悔い改めずに罪を積み上げていく者たちに対する神の裁きが整えられて行くのと同時に、キリストの血によってその罪の縄目から解き放たれ、神のものとされている姿を描いていきます。

## 2B 祭司の王国 6

そして、「私たちが王国とし、祭司としてくださった」と言っています。ここの「王国」は「王」とも訳せる言葉です。キリストは再臨されて、神の国を立てるだけではありません。ご自分の国を立てて、それからご自分のものとなっている者たちに、この御国を受け継がせるのです。人々を贖い、その人々を罪から解放し、それから祭司として王として、御国を受け継がせるのです。ペテロが、その召命についてこう言いました。「1ペテロ2:9しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。」

主は、アダムを造られて、アダムが神のものとされることによって、被造物が支配されるようにされました。アダムが神の前に出て、神に仕えることによって、アダムの支配によって神の国が広がるようにしていたのです。つまり、これはある意味で「祭司の王国」と言えるでしょう。アダムが神の前に出て、そして彼が被造物の前に来て神の祝福を広げます。それによって被造物は神の支配を受けるといふことで、そこは王国なのです。ところが彼が罪を犯しました。しかしキリストが、その罪を贖う方として来られます。主はアブラハムを立てて、アブラハムの子孫イスラエルに祭司の王国となることを宣言されました。「出 19:6 あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」今、キリストを受け入れる者たちはユダヤ人だけでなく、多くの異邦人にも及び、それで教会に対しても、祭司の王国、聖なる国民と主が呼ばれているのです。私たちが神の近づくことが務めであり、そしてその祝福をもって人々の前に現れる務めを持っています。黙示録において七つの教会に対する約束、勝利する者に、御国を受け継ぐ約束が数多く書かれています(2:26)。

そして、「栄光と力が世々限りなくあるように」とあります。私たちが祭司の王国となるのは、すべてキリストご自身への栄光となるからです。

## 3A 主の来臨 7-8

そしてヨハネは、黙示録全体のクライマックスになる出来事、また、イエス・キリストの現れの究極の姿である、再臨を述べます。

### 1B 嘆くすべての者 7

<sup>7</sup> 見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は 彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。

主が戻って来られます。地上にいる者たちが悲しむと書かれていますが、ここには教会は含まれていません。教会は、共に治める者として、地上に戻って来られる主と共に現れます(コロ 3:4)。黙示録 19章、再臨のキリストに付いていく存在が書かれていますが、これは教会です。「19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。」

しかしここは、キリストを拒み、受け入れない者たちがキリストの栄光の姿を見て、胸を叩いて悲しむのです。パウロは、テサロニケの人たちに、迫害を与えている者に忍耐を与えるイエス様の言葉、そして慰めとして、福音を拒む者たちに対する神の正しい裁きをはっきりと描いています。「2テサロニケ 1:7-10 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。8 主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。9 そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることとなります。10 その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの中で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。」それで、主の裁きが正しく行なわれたことを確認するように、ここ 7 節も、「しかり、アーメン。」とあるのです。

「見よ、その方は雲とともに来られる。」であります。イエス様がオリーブ山の上で同じことを語られました。「ルカ 21:27 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」(その他、マタイ 24:30)そして、この力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗ることについては、ダニエルによって預言されていたのです(7:13)。ですから、イエス様がご自身がキリストであることを、このダニエルの言葉によってはっきりと大祭司カヤパの前で告白されて、それで死刑宣告を受けられました(マタイ 26:64)。

元々、この雲は何を意味しているのでしょうか？どんな意味合いがあって、主は雲に乗って来られるのでしょうか？「偉大な力と栄光とともに」とルカ 21 章 27 節にありましたが、偉大な力と栄光と関わりがあります。ダニエル書においても、世界帝国を表す四頭の獣を打ち滅ぼすための戻って来られるキリストが、雲に乗って来られるという文脈の中で語られています。雲が初めに出てくるのは、洪水の後、箱舟から出たノアに対して神が語られた言葉です。「創 9:14 わたしが地の上に雲を起すとき、虹が雲の中に現れる。」と主は言われましたが、それはちょうど、天における神の栄光の輝きがあって、それが地上に臨むことを象徴しているかのようです。エゼキエル書 1 章において、ケルビムの上に乗っておられる方が、「その方の周りには輝きは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、まさに【主】の栄光の姿のようであった。(28 節)」とあります。そして主は、罪を犯しているエルサレムに対する裁き、それから諸国に対する裁きを行なわれっていきます。主が地上に臨まれるに際して、罪や汚れは力をもって裁かれ、それでその力と栄光が現れるのです。

そして、栄光の雲は、地上においては幕屋また神殿において現れました(出エ 40:34-3)。主は、栄光の輝きをもって天から降りてこられた時に、シナイ山において黒雲がありました。そして荒野の旅においては、雲の柱としてご自身を表しておられました。そしてソロモンの神殿においては、その献堂の時に、栄光の雲が宮に満ちています(Ⅱ歴代 5:14)。すなわち、天における主の栄光とその力がこの地上に現れるのがキリストの再臨であり、また地上においては神の容赦ない裁きが行なわれることがその意味に含まれています。

ヨハネは、見る人が、「すべての目」であることを強調しています。誰もが主イエス・キリストの裁きを免れることはできません。多くの異端やカルトが、キリストが既に来たということを話します。けれども、イエス様は初めからそのような惑わしがあることを予め、語ってくださっていました。「マタイ 24:26-27 ですから、たとえだれかが『見よ、キリストは荒野にいる』と言っても、出て行ってはいけません。『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはいけません。27 人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのとちょうど同じようにして実現するのです。」

そして、「彼を突き刺した者たちさえも。」と言っています。彼を突き刺した者とは、ユダヤ人たちのことです。イエス様はご自分の民のために来られたのに、その民は受け入れなかったとヨハネは福音書1章で話していますが、なぜなら、イエス様は、世界の諸族が見ることができるように戻って来られるのですが、エルサレムのオリーブ山の上に立たれるからです(使徒 1:11)。これは、主がゼカリヤを通してお語りになっていたことなのです。ゼカリヤ書 12-14 章には、全ての国々がエルサレムに攻めてくること、そして主ご自身が戦われ、その姿を見て、エルサレムの住民、そしてイスラエルの全土が悲しみ嘆くことが書かれています。「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」そして、13 章 1 節に、「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。」とあり、彼らが御霊によって清められ、新しくされます。

## 2B 神なる主 8

<sup>8</sup> 神である主、今おられ、昔おられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

これはまさに、旧約聖書に何度も出てくる、神である主ご自分の宣言に他なりません。つまり、主イエスが神ご自身である、神と一つであることを表しています。「わたしはアルファであり、オメガである。」の宣言の後には、「最初であり、最後である。」という言葉が付け加えられている写本もあります。アルファはギリシア語の最初の文字で、オメガが最後の文字なので、同じ意味です。ヤハウェなる神が、永遠に生きておられ、全ての人間の歴史の初めから終わりまで支配されている、支配者であることを宣言している箇所です。「イザヤ 44:6 イスラエルの王である【主】、これを贖う方、

万軍の【主】はこう言われる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はいない。」「48:12 わたしに聞け、ヤコブよ。わたしが呼び出したイスラエルよ。わたしがそれだ。わたしが初めであり、また、終わりである。」

イエス様が天に昇られてから 60 年が経ち、さらにローマ帝国による圧迫と迫害が激しさを増している時に、主は、ご自身をこのようにして明らかにされ、確かに今の私たちにも支配者となってくださっていることを明らかにしておられます。さらにこの最後にイエス様を目撃した使徒ヨハネが老いて、まもなく世を去ろうとしているのですから、主はご自身が生きておられること、歴史を通じてヨハネの時と何ら変わりなくおられることを示しているのです。